
美男と野良猫

伊榛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

美男と野良猫

【Nコード】

N7925M

【作者名】

伊榛

【あらすじ】

記憶喪失の元人間（自称）と、天性の頭脳を持つが他人を受け付けず高慢な美男。

縁あってひとつ屋根の下で共同生活することになるが、互いが居候先の娘である春陽に恋をしまつて……。

友情や家族を盛り込んだ、ちよっぴりファンタジーな恋物語。

1話『きいと城井深能』 - 表

四月某日

今、ちょうど桜が見える。歴史ある老齡な八重桜の美しさに、僕は今日初めて気がついた。

こうして見ると、色合いは独特だし、無数の花弁　正確には雄しべだが　が催す不思議な形と云うのは益々深みが出ていて面白い。空は青々と清んでいて、陽の光が暖かく過ごしやすい午後だ。

色彩論に於いてゲーテは色を生き物のように表現している節があるが、そんな情緒に溢れた彼の感性を、今なら僅かばかり理解出来るかもしれない。そんな事を徒然と考えるほどに、今日の僕は穏やかに流れるような気性だった。

さて、気に入りの桜を見下ろしつつ、窓際で僕の作業は進んでいく。

日々を遡って思い出す　なんて、一見どうしようもない事を、僕は黙々と続けていた。

こうして思い返してみると、僕はすこぶる記憶力の良い性分の方だ。どうでもいいことまで細々と覚えているもので、日記のように日々を纏め返すと、頭の中で執った筆が止まらない。

でも、僕が馬鹿なことは変わりの無いことで、だから、早く君に会いたい。

会って、自分の愚かさがおよそ酷いものであったことを認め、そして、その上で君に伝えたいことがあるのだから。

ただ、ただ一心に伝えなくては為らないことが、僕にはある。

11月27日

その日はどんよりとした曇りの日で、僕は木枯らしに身体を震わせながら眼を覚ます。

そこは何処か広い庭の真ん中にある、とてつもなく大きな木の下だった。

僕は周囲の閑散とした様子に不安感を募らせながら、その巨木を見上げる。枝はよく繁っているが、枯れ葉はすっかり落ちきって侘しい広葉樹。漠然と思ったことは、それが日本のあちこちにある桜の木であろうという、根拠の無い予測だった。

そして、その次に思ったことは、流石に悠長にしている場合ではないことを僕に報せてくれた。

で、僕は誰だ？

自分が何者なのか、それが全く記憶から抜け落ちているのだ。知識があるということは、謂わば 生活史健忘 なんて代物なのだろう、ふむ。

さらに辺りを観察して考えた。どうやらここは、学校か何か、とにかく巨大な敷地の中の一部らしく、周りには校舎らしい建物が疎らに建つ。

僕は今、四足で身体を支えていた。前足の様子からして、自分の生物分類学上の判断は凡そ出来る。

確認のため、少し離れた場所にある、手入れの行き届いた人工の

池まで歩いていった。

水面に写る自分の姿に納得がいく。

やはり僕は雄の猫のようだ。

「三毛猫だ」

誰かが僕を指差す。人間の若い男が二人で歩いてきた。

僕は猫なのに人間の言葉が解るし、そしてこうして人間の知識を用いて物事を考えている。記憶喪失前の僕はどんな猫だったんだろう。

「毛並みが良いな、飼い猫じゃね？」

「首輪着けてねえけど、だっこしていい？」

え、嫌だ嫌だ。だって僕は雄猫だよ。安物の香水臭い男にだっこなんてされたくない！ 僕の嫌がり具合も何のその、若い男たちは僕をだっこしたりする。でも猫の扱いには慣れているのか、確かにリラックスする触り方をしてくる。

この首の裏とか、喉元とか、すごく気持ち良い。

いつの間にか建物から出てくる、私服姿の若者たちの数も増え、関わらないにしても、遠目からすっかり愛玩状態の僕に注目する。もしかしたら、この中に僕の飼い主が居るかもしれないと思った。

「すげー、こいつキンタマついてるー！」

「昼間から下品だな。でも珍しい。拜んだら今度の期末考査、調子上がるかな」

「お前、いっつもあと一步で城井きいに負けるもんな。なんなのかね、あいつ。何時までもいけすかねえ奴だべ」

「そうなの。結構がり勉してるのにねえ。にゃんこー、俺の悩みを聞いてよー」

そんなどうでもいい愚痴をしないでくれ、と内心でうんざりしたが、でも収穫はあったんだ。

ここは 鴉埜学院 という私立の学校。そして彼らは医学部大学生。

どうやらここは広大な学園にある中庭で、主体である高等学校と、

大学の医学部、理工学部キャンパスを繋ぐ中継地点であるようなのだ。

どうしてそんなところで寝ていたのか、記憶の無い僕には見当もつかない。

新しいコンクリートの校舎の壁にある内容によると、高校は普通科と衛生看護科、それから理美容科という学科があるらしい。そこでまず、思い出した。

この学校は、最近になって理美容師を育てる学科を始めたと、地元のニュースでは話題になっていたことを。マイナー新聞の地域面でも……。

つまり、僕はこの近辺とはいかないが、必ずしも遠くで生きていたわけではなさそうだと云うことが解り、そして、僕は人でも可笑しくないほど人間らしい知識や社会情報を身に付けていたようだと言ふこと。これらが僕の推測となる。

とりあえず、特に高校生が帰宅する時間帯になると僕は益々好奇の目に曝され、動き辛くなるということで、その日は桜の木の上によじ登って、人間観察をじっくりしていた。

11月28日

次の日は直ぐにやって来た。

寒くて辛い師走前の深夜を乗り越え、でもその間に僕が考えていたことは、そんな苦しみを吹き飛ばすようなもつと辛い、嵐のようなことだった。

僕がもし、人間だったとしたら？

この姿でとんだ夢想家かもしれない。

でも昨日の人間観察が功を奏して、僕は夢想するほどの可能性を手にいれたのだ。

まず、昨日が金曜日だったこと。この情報により、僕は太陽暦の概念を完璧に理解していることが判る。そして、大学生が話す難しい授業内容を、結構楽に呑み込んでいたと云う事実。僕が人間で、しかも並みより頭が良かったのかもしれないと自惚れるのは、その理解力の高さからだ。

でも、もしそうだとしたら、いよいよ本当に困ったものだ。だって、人間ってのは気儘な三毛猫とは違って恐ろしいほどの社会性を持つ生き物だ。そりゃあ、猫にだってボスだとか、そういう上下関係はあるだろうけれど、孤独にのりくらりとやっている野良だって沢山いる。人間ってのはそう簡単な生き物じゃない。どれくらい僕が生きているのか定かではないが、得ている情報を理解する力からして、そう幼くは無い筈だ。

そうして猫の寿命より生きて積み重ねた様々なものは、きつと些細なことで崩れてゆくに違いない。

僕は気儘だ。でも、こうなる前の僕には堪ったものじゃないだろう。まあ、仮に人間だとして、本体は何処に行っただ、そしてそもそもどうして猫の姿になっているんだ、とかあまりに矛盾が多いのは確かだ、認めざるを得ない。

そういえば、外国人の英語も聞き取れていた。語学に堪能な猫とというのも可笑しな話だ。

夢の中だと思いたい。でもあまりに長すぎた。僕という赤子の人格は、この夢の世界にすっかり侵食されてしまったようだ。

朝の十時を校舎の時計が示す。

探検しながらこの学校のことを覚えていったのだが、まず、桜の木がある中庭を、南側と北側にある高校の校舎が挟んでいる。南北は芝生の斜面になっていて、高校生は階段などを降りてから中庭のベンチなどで過ごすようだ。

東西には小道が作られていて、高校正門である西から東へ抜けると医学部と理工学部のキャンパスにたどり着く。途中、立派なグラウンドや講堂、体育館などがあるというわけだ。

だから、今朝僕を見つけたのは、どうやらグラウンドに用事があったらしい、高校生の男子だ。

「野良だ」

その時、桜の木によじ登っていたのだが。南側の斜面の上から見下ろすように彼は居た。

背丈はそこそこ。

野球の黒い練習着と赤のスポーツバッグで、クラブの終日練習と行ったところだろうか。

「木登りが上手だなあ」

朗らかな声で少年は駆け降りてきた。

近くで見るとそこそこ端正で健康そうな顔付きをしており、何よりの人の善さが判る笑顔を持っていた。だが、運動をしているわりに髪は長いように思う。

「美人な三毛だなあ」

「アキ、お前遅いぞ」

遠くから叫んできた彼は制服姿で、アキと呼んだ最初の少年に駆け寄る。

精悍な顔付きで体力がありそうだった。

「ヒロちゃん、見るよ。野良がいるよー」

「ああ？ そんなことはどうでもいいだろう、遅刻しておいて……って、おっと、ほんとだ。いや、どう見ても飼猫だ。毛並みが

良い」

僕は様子を見るため木を飛び降りて 二人はびっくりと驚いたよ
うだが 彼らの傍に寄った。

「ほらな、野良じゃないぜ、人馴れしてる」

だって、人間かもしれないもの。

今の僕の気持ちを知ってくれたら良いのに。

僕がどれだけ鳴いたって、見たって、引つ掻いたって、君たちには何も伝わらないのだろう。僕を夢から覚ましてくれる起床の合図にはなってはくれないだろう。

なんてもどかしいんだろうね。

野球少年の二重の眼が丸くなる。それは大きな瞳で、存在感は十分にあつた。

「……なあ、ヒロ。ちょっと先に行つててくれないかな」

「お前を探しに来たつてのになんだそれ」

「五分で行くから。ね、マネージャー」

制服の少年は渋々了承し、ただしペナルティは免れないと警告をした上で、中庭の小道を西へ走つていった。

「さて、三毛よ」少年はぎこちない笑みをこちらに向けてきた。

「俺には君の切ない訴えが聴こえてしまっただけど、なんでだろう。熱でもあるのかなあ」

彼は緊張を隠せなかった。

脂汗は冬空の下では不釣り合いで、でも声だけは、最初の朗らかさを保っていた。

それは、そのぎこちない彼の姿は朝日に照らされて。

まさしく僕の光明だったんだ。

彼は最初、僕の隣に腰掛けてから悩ましげに僕を見下ろし続けた。僕が話し掛けると反射的になにか言っけれど、その直後は決まって

自己嫌悪に陥る。

「寒すぎて頭が凍死したのかなあ」

それにしても、相変わらず温厚そうなお喋り方で、声だけを聴いているとまるで焦っているようには思えなかった。白昼夢の中にいるのだと決めつけているようだが、それなら早く野球の練習に加われれば良いものを、彼はそれをしない。なんだかんだ、僕のことを気にしているようだった。

それから彼は考えて、自分の携帯電話をポケットから取り出した。赤が好きらしく、毒々しくない洗練された赤のスライド式のものだ。曰く、これは夢だと仮定する。夢は自分の思考が見せるものだから、自身の経験や知識を伴う。つまり僕が彼の知らないことを話し、インターネット上で確かめられれば、この状態は彼の夢の中ちは云えず。少なくとも何か特別なことがこの場で起こっていることを認めざるを得ない、と言う。

思うに彼は優しい人間だ。なんだかんだで僕の存在を認めようとここまでしてくれるのだから。僕だったら　と云うより、多くの人間だったら『見なかった』として早々に記憶の奥に片付けてしまおうだろう。

僕は自身に関する事柄を忘れた、記憶喪失であることを前置きし、何を言うか考えた。昨日、僕は語学に堪能であつたらしい事を確かめていたものだから、少年が絶対に知りそうにない数学の公式だとか、ドイツ語の単語やその日本語訳、文法上の特徴などを挙げてみた。

「お見事、ドイツ語が出来る三毛猫なんて、ちょっと面白いねえ」
携帯をかちかちと指で操作しつつ、少年は感嘆を溢す。

「俺は加納秋人^{かのあきひと}。鴉埜学院高校普通科2年」

彼は携帯を片付けてから、すつきりとした顔で言ってきた。こうなった以上、僕の事はとことん相手にする構えのようだ。潔くて、前向きで、面白い少年だ。

「よし、にゃんこが人間の中身を持っていると仮定して　思うに、

お前って医学に精通しているんじゃないかな。ドイツ語の辞書だと、さつき君が話した単語は医学用語が多いんだよね。ここの大学は医学部が有名で、キャンパスも東側にあるんだけど、それと関係があつたりしないかな」

なるほど、記憶喪失以前の僕が、この学園に関わりがあつてもおかしくはない。目覚めた場所は敷地のど真ん中だ。

「俺のひとつ上のお姉ちゃんが衛生看護科の三年生だけど、実習とかで大学のキャンパスによく出入りしてるんだ。ちょっと調べてみようか」

加納くんはそう言って立ち上がる。

「今日は俺の部屋にこっそり泊めてあげる。今夜は冷え込むみたいだしね。あ、確認しとくけど、中身が女の子って可能性は絶対に無いよな？」

僕がそれは無いと思うと答えたら、良かった、女に見せられる部屋じゃねえもんと、茶目つ気たつぷりに笑顔を見せた。

それから加納くんはグラウンドへ走り去ったが、僕は彼が練習を終えるまで待つ必要があつた。夜の七時に終了だと言うのだから、これは辛抱強く待たなくてはいけない、思いつつ、桜の木の上で身を縮ませていると、最初こそ大学生やらの出入りがあつたが一度途切れ、お昼の二時を廻って漸く大学の方から人が歩いて来た。

やや痩身で、シンプルな薄茶色のダブルコートに身を包んだ黒髪の男だつた。

僕は彼に無性に惹かれて、眼が離せなかつた。

勿論、恋慕とか変な意味じゃない。僕は直感で、彼を知っていると思つたのだ。既視感デジャヴとでも云うのか、僕は彼をよく知っている気がしたのだ。

凡そ居ないくらいの、綺麗な顔をした男だと思つた。遠目でも客観的にそう判断できる。それはいつそ気持ち悪いほど、人形のような冷たく整つた顔立ちをした美男だつた。

僕は彼に見えないように木を降りて、近くの腰掛けベンチの下に

潜り込んだ、下からの方が男を観察しやすいように思ったからだ。

この目鼻立ちの整った男は木の前を通りすぎ、正門に向かって早足に進む。十中八九、大学の学生だろう。理知的な雰囲気、如何にも優秀な理系を連想させる。

「城井^{きい}さん！ 城井さん待ってください」

後から、高校の制服に身を包んだ女子が居ってきた。灰色のブレザーは、校章のエンブレムとワイン色のネクタイと愛称がよく、英国風のぱりつとした肩が格好良い。短髪ですらりとしたスタイル女子生徒の呼び掛けに、若い男も立ち止まる。

「……何か用？」

低くはないが、『きい』と呼ばれた男の声は独特な声質を持っていた。一度聴いたら忘れないような声だ。ますます、それに対して妙な気持ちになる。

「城井さん、あんな言い方は無いと思います」

「何の話？」

「しらばっくれしないで下さい。先輩が女性に人気な事はよく承知しています。まさか、誰にでもああいう言い方を？ だとしたら最低です！」

女子の顔はよく見えない。声は怒気に満ちているけれど、僕は懐かしい気持ちを抱く。嫌いじゃない。

「最低なのは君の方だろ」男はうんざりと溜め息をつく。「名乗りもしないでつらつらと御託を並べて」

なんとも居づらい場面に出くわしてしまった。僕は男の方『きい』という名前を覚えた上で、その場をこっそりと離れた。男女の修羅場なのかは知らないが、そういつたいさかいを好奇の目で楽しむ余裕など、今の僕には皆無だった。

なにか言い争いの声が絶えないが、僕はお構い無しに校門の方へ去って行った。

この二人の男女が、僕や加納くんにとって様々な困難と試練を呼

び込むとも知らずに。

加納秋人　加納くんは野球部の遊撃手なのだと話した。鴉埜の強さはそこそこ。いつも地区大会ではトーナメントを半ばまで進めて、そして消えるようだ。

僕には『遊撃手』が一体何なのか、初めは理解が出来なかった。曰く、野球に於て内野守備の要のポジションであるようだ。ただ、一年生の後輩に恐ろしいまでの強肩がいるらしく、試合によっては彼にポジションを譲ることもしばしば、との事だった。

「それにしても、男子なら野球を知っているとか考えたけど、それでも無いみたいだね。偏見だった」

野球つて九イニングのうちに攻撃で点数を多く稼いだ方が勝ちでしょ。ぼくは記憶を辿ってそう言ったが、彼は難しい顔をした。

「まあ間違っではないけど。そんなもんか、興味ない人の評価なんて」

どうして、僕が興味の無い人だと断言出来るものか。以前の僕は野球少年だった可能性だってあるのに。その疑問に対し、彼は「好きだったら、もっと野球の知識に深いはずだし、たぶん、そんな言葉は出ないよ。例えば記憶を喪っていたとしても」と答えた。

加納くんは自転車で十分ほどの距離を白い息を吐き出しながら進んでいく。僕は彼が貸してくれた学校指定マフラーを丸くならした身体に巻き付けて、自転車の籠の中で北風に堪え続けていた。辺りはすっかり日没で、大きな河の橋を渡る時などは、もう本当に死んでしまうのかと明日を諦めかけたほど、寒く辛い道中だった。一番辛い加納くんは、周囲に人間の居ないことを把握した上で、僕との会話を楽しそうに、そして鼻の頭を馬鹿みたいに赤くさせて、ペダルを漕ぎ続けた。

どうして、僕の言葉を信じてくれるの。だって、普通はありえないことを、君はいとも容易く受け入れているんだよ。

「それはさ、お前を信じたいって思うからだよ」

彼は住宅街を走り抜ける。

「俺、野球だって花形を任されてみても自信が持てないし、勉強だって真面目にやっても大したこと無いよ。でもひとつだけ、自信がある特技があつてね。俺には、信じられる人を見付けることが出来るんだ。これに気づいたのは最近なんだけどさ。お前は信じられるんだ、人間ですらないお前の、俺にしか聴こえない幻聴のような言葉を」

けらけらとふざけ半分にそういった彼。

不思議な男だ。

振り替えると、夜なのに彼の笑った顔が鮮やかに視界を奪う。見慣れた光景のように、何度も見た写真のように。

少なくとも僕の色感覚は、猫のそれとは違う、人間のものだと気が付いた。

でもそれより、僕は何より、彼の特技と云うのはあながち的はずれでもないかと思っていた。

僕もまた、冗談にしか聴こえない加納くんの言葉を信じてしまったのだから。

家は庭もガレージもついた高級そうな一軒家。暗くて全体像はよく見えないが、加納くんは僕を下ろしてガレージに自転車を収めた後、カードキーでメタリックな門をカードキーで開ける。僕を抱えて玄関の扉を開ければ、母親らしき人の声が奥から出迎える。

「うん、先にシャワーを浴びてくるから」

声に応えながら、彼は大急ぎでスポーツバッグからタオルを取り出すと、僕の足の裏を綺麗に拭いて、それから二階に駆け上がりせた。

俊敏なもので、彼も直ぐに居つてくると、一番東側の二部屋のうち、右の部屋のドアを開けた。

そこそこ散らかっていて、でも基本的に物が少ない。典型的な男子高校生のフローリング六帖間。

「ベッドにタオルケットを敷いておくから、ちょっと楽にしていなよ。マジでひとつ風呂浴びてくる」

解ったよ。勿論、部屋の詮索はしない。そんな野暮なこととはしないけど、お願いだからテレビを点けてくれないだろうか。情報が欲しくて僕は飢えている。不思議と腹の方は心配要らないようだ。

「今はNHKくらいしか、ニュースやっつてないと思うけど」

彼は20インチくらいの、ちょっと贅沢なデジタルテレビの電源を入れてくれた。しかし、そのニュース番組も終盤で、画面には気象情報のパネルが映し出されていた。音を最小限に抑えつつ、大急ぎでシャワーを浴びに行った。

流石にリモコンの操作方法は数秒を要さず理解出来たが、僕はチャンネルをそのままにして眺めていた。小さな音なのに、よく聞き取れる。

それは、半時間構成のドキュメンタリー番組だった。内容は、現在の医学界を支えた先人たちの話。

形成外科手術の重鎮である三國京介、みくにきょうすけ 天才的な技術で外科医の育成も熱心だった城井能則、きいたかのり 救急医療専門の郷田清、ごうたきよし さらに現役の脳外科医として紹介された白滝忠としらたきたかし という人は、なんと鴉埜学院大学の教授であるそうだ。

今、必ずしも必要でない情報なのは確か。

だけど、結局最後まで熱心に観てしまったのは、加納くんが僕を医学と結び付ける仮説を立てたからだろうか。

いいや 違う。

僕は首を振った。

登場人物に強く惹かれていた。強烈に。

やはり僕の記憶は、この街に置き去りにしてしまったのだと、妙

に納得してしまった。

だんだんと居心地が良くなってくる。加納くんが親切にも電気ストーブを点けてくれていたらしい。そうになると今度はお腹が空いてきた。

だが、つかの間の平穏はドアの開く音で容易く終わった。

「秋人、いい加減に和英辞書、返してくれる？」

髪の毛の短い女の子が入ってきたかと思うと、僕の身体は強ばって使物にならなくなってしまった。

加納くんと同じ鴉罫の制服に身を包んだ、背の高い女の子。顔は少し大人びていて、例に漏れず僕は既視感を抱いた上に、さらに言いがかりの無い胸の高揚感で眼が離せなかった。

「いないの。勝手に取って……」

部屋を見渡して、僕に気付く。

「猫」

加納くんに話し掛けられた時でさえ冷静でいられたのに、僕の心臓　というより、猫の小さな心臓は、ここに来て脆く、緊張感で脈打つ鼓動は速くなるばかり。

「あの馬鹿……野良猫連れ込んで、何考えてるの」

加納くんとは違うシャープで賢そうな顔立ち。中々の美人で、ショートヘアが小顔を引き立てる。

彼女は判りやすいほどに激怒し、大股気味に部屋を去って行った。残された僕はどうしていいか判らず、ただ置物のようにその場で固まるばかりだった。

僕は聞き覚えのある声を頭の中で再生させ、そして漸く、彼女が昼間に『きい』という男と修羅場を繰り広げていた高校生と同一人物であることに気付く。妙に気になったあの男もそうだったが、彼女の声もまた、低く少し掠れ、そうそういないような独特な声なのだ。

しばらくして、髪が濡れたままの加納くんが、彼女に引っぱられる

て部屋に帰ってきた。有名なブランドの灰色のジャージ姿だ。

「お姉ちゃん、耳引つ張んな！ 痛い」

「このにゃんこ、あんたどうするの？」

「だから、旅行に行く友達の飼い猫だって。ちょっと泊まらせるだけだよ。世話は俺独りでするから」

加納くんへの言葉を、彼女はまったく信じていないようだった。

この言い訳は無理がある。

「……まったく。ちゃんとお母さんに報告しなさいよ。あんたは部活もあるし、他人様ひとさまの子を満足に世話出来る立場じゃないでしょう。名前は？」

「え」加納くんはぎくりと肩を跳ね上がらせる。

今の僕に名前は無い。

彼が一瞬僕をすぎるような瞳で見つめてくる。

「この子の名前よ」

「えっと」

僕は名前と聞いて、とっさにあの美男を思い浮かべた。たぶん、

彼女の力強い視線と怒気に気圧されて、あの男を連想したのだろう。

「えっと」加納くんは愛想笑いを作る。「きい……『きいちゃん』って云うんだよ」

「きい……嫌な名前ね」

「そんな、名前にケチつけないでよー」

加納くんは、怪しまれていないかと怯えながらそう言った。彼女は首を振って、

「違うの。ちよっと不愉快な人間を思い出ただけよ。じゃあ、あとできいちゃんを連れて来なさい。あんたって子は、優しい子なのは知ってるけど順序を考えないわよね」

彼女は溜め息をついてから、僕をもう一度見る。

僕はたぶん、素っ気な無い感じですぐに目をそらした。

「顔立ちの良い猫ね。すごくプライドが高そう。ますます、そっくりね」

どういう意味なのか僕にはさっぱり理解が出来なかったものの、彼女はそれまでで初めて愉快そうな笑みを浮かべ、「うちの家族がみんな猫派で良かったね」と言った。

考えるまでもなく、僕はその笑みの虜になった。

すごく好きな笑みだ。加納くんののんびりとした話し方と同じくらい、とても心安らぐ、彼女の笑顔。

姉が出て行ったあと、加納くんは安堵の溜め息をつく。

「あれが、衛生看護科に通う、俺のお姉ちゃん。春陽はるひって言うんだ。あの通り少し物言いがきついんだけど、俺には優しいお姉ちゃんだよ」

それは納得した。彼女は弟を優しいと言っていたが、おそらく彼の嘘を見破った上で、僕のことを半ば受け入れてくれたのだろう。弟をよく信用していて、それで見守る器量があるようだ。

「とりあえず、仮の名前ってことで、お前の名前は『きい』だからね」

頷いた。成り行きだが、もう変えようがないだろう。

それよりも、困ったことになった。

どうしよう。記憶喪失の僕は余裕の欠片もない筈なのに。

なんてことだ。

きみには、この時少なくとも一定以上の好感を持った。たった少しの間で。

幼子のような無力な僕が、それをきみへの一目惚れとはつきり自覚するのにも、そう時間は掛からなかったのだけれど。

1話『きいと城井深能』 - 裏

11月28日

城井深能きいみたかという男ほど、自信家で高慢なところがあり、さらに若さのわりに気難しい己の姿をよく理解している者はそういないかもしれない。

そのくせ、彼は自分が優秀な人間で、それは学生から完璧な社会人へと変わったとしても揺るぎ無いと知っていたものだから、おそらく周囲の同級生とはおよそ雲泥の差　　などと言い切れる余裕に満ち溢れていた。

唯一彼が自覚していないこと、というか、あまり納得出来ない評価が、彼自身の浮世離れした端正な顔だった。男にしてはあまりに儂げで、女の基準では凛々しく力強い表情を持つ。これ、といった例えの出来ない、不思議な個性を持った美男なのである。

数年前の高校生の時分には、ろくな勉強もせずに全国模試で首位に立ち、おまけに家は十分な金持ちだ。その為、昔から女には言い寄られる人生だった（悲しいことに男にも稀に）。彼は自身が、世の人間から見て、嫌味そのものの存在であると理解し、かといってそういった状況が起こす困難には冷静に対処し続けてきた。興味の無い女に擦り寄せられ、犬に吠えられたくらいでは、彼の心は微動だにしないのである。

が、流石に今日は困ってしまった。

彼は鴉埜学院大学の医学部に通う四年生だ。キャンパスは付属の高等学校と同じ敷地内にあり、そのお陰で、高校の衛生看護科の学生とは実習の教室を共有している。

おまけに特殊な環境である為に、おそらく理事会が経営の為に打

ち出した方針で、彼ら高校生と合同実習をする機会もあった。

今日は土曜日で、自身はゼミの教授に呼ばれて大学に向かったのだが、行きに、医学部キャンパスの西玄関に立っていた女子高生に話し掛けられた。

「城井さん、少しよろしいですか」

「なに？」

相変わらず人当たりの悪い冷やかな声だと自分でも思ったが、嫌なもの嫌だ。愛想なんてものは、能力の無い人間の為の技だ。自身の将来と回路が繋がりそうにない人間に振り撒くほど、俺は浪費家じゃない。ほとんど個人主義の深能にはこれが丁度良い考えだった。

彼女の名前は穂積ほづみまりこ。衛生看護科の三年生で、よく深能の解剖実習を見学したものだと言う。生憎だが、邪魔くらいにしか思わない高校生の顔など覚えていないので、正直に言つと、彼女はまたら熱い視線で、深能をどれくらい大好きなのか語った。

あまりそういつたことに積極的な風には見え、彼女の顔はすっかり茹で上がり、緊張の余り性急で独り善がりな物言いだった。

そこに腹は立たなかつたが、応える気の無い告白を最後まで聴く気にはならず、おまけに、寒いのに屋内には入れない。

「つ、付き合つて下さい」

「きみのことを何一つ知らないし、知ろうと思わない。どうでもいい。それから、大学に迷惑が掛かるから、今後こういうことはあまりしないほうが賢明だと思う」

餓鬼を相手に言い過ぎたかとは思つたが、遅かつた。

一度声に出した言葉が収集できたら楽だというのは、どんな人間でも一度は考えたことのある妄想だろう。反省の念と云うよりは、面倒を呼び寄せたことに対する後悔を彼は抱いた。

彼女にとって深能の物言いは相当にきつかつたよぶで、辛さに堪えきれずそのまま泣き出してしまった。こうなれば始末に終えず、彼はうんざりと云う風に溜め息を溢し、それが彼女の洪水を増幅さ

せる引き金になり。

「面倒だな。悪いが俺は忙しい。じゃあ、これで」

既に教授との約束の時間まで五分と無く、いつも時間前には現れる教授のことを考えれば、名前も今覚えたての目の前の女に構う暇はない。

深能は足早に、施設内に姿を消した。

そもそも、どうして 彼女は休日、それも朝の早いうちからあの場にいたのいたというのだろう。

半時間後、もうその穂積まりこがない今朝の現場を通り掛かり、ふと考えた。

深能は、脳神経外科の権威である白滝忠教授の愛弟子だ。同じく医者である深能の父とは旧友で、そのついで、小さい頃から可愛がられてきた。

今日は、早々に単位取得を終えそうな深能が、暇なので彼の研究の手伝いをする約束だった。しかし、彼の方は現役の医者であるため大変な多忙さ。珍しく、元々開けていたスケジュールが土壇場で埋まってしまった。白滝教授の忙しさはよく理解しているので、少し喫茶店でコーヒーを飲みながらドイツ語の勉強がてら医学書の原文に目を通し、あとは大人しく帰ろうかと云うところだ。

高等学校の校舎間にある中庭では、相変わらず存在感の大きな桜の木が、すっかり葉を落として春先に備えていた。

「城井さん！ 城井さん待つてください」

背後から女の声がする。自分を呼んでいることは明らかだったが、深能は聞き覚えの無いその声に反応せざるを得ない。早く帰りたいのに、とんだ邪魔であるが。

振り替えると、短髪で長身の女子高生がこちらに走ってくる。まるで。まったくもって、今日はとんだ厄日である。鴉塾学院

高校の女に絡まれてばかりだ。

「……何か用？」

愛想の欠片もないことはよく承知していたが、彼の不快指数を以てすれば当然の結果だった。

この女子は、なるほど、そこそこの美人だが、いかにも気が強そうで面倒そうだ。同じ感じの女には大学で散々付きまとわれているから、この手の人間には心底うんざりしていた。

彼女はあからさまに怒気を込めた声色で、早口にこう捲し立てた。
「城井さん、あんな言い方は無いと思います」

深能の眉間に皺が寄る。

何だ、いきなり。

心当たりを考えてはみたが、やはりこの女子とは初対面であって、今朝の彼女以上に不可解な言い掛かりだと、深能は思わず溜め息をつく。

「何の話？」

「しらばつくれなくてください。先輩が女性に人気な事はよく承知しています」

深能も自覚があるので特に動揺はしない。別に、女好きでもなければ迷惑なだけのステータスだ。

彼女は続けて言う。

「まさか、誰にでもああいう言い方を？ だとしたら最低です！」
憤慨というような雰囲気気温以上に冷たい場面になる。

何を突然。今朝の穂積まりことという女子高生もそうだが、随分性急で独りよがりな物言いだ。

深能は冷静に話が出来ない人間を見下すような節があり、だから彼女にもやはり冷たく、ごく自然に言い放った。

「最低なのはきみの方だろ」ほんの小さな溜め息混じりに。「名乗りもしないでつらつらと御託を並べて」

これは尤もだと思ったのか、饒舌だった彼女が初めてまともな口をつぐんだ。

がさりと背後で音がして、振り返れば一匹の野良猫が、芝生の坂を駆け上がって行くところだった。人間たちの険悪な雰囲気に辟易したのかもしれない。そも、猫があまり好きではない深能にとって、離れていってくれて問題なかったのだが。

「用事はそれだけか。じゃあ失礼」

「加納と申します」

「なに？」

「加納春陽と申します。少しお話を聴いてください」

加納春陽はきつと鋭い目をしながらも、そこから目を逸らさせないような妙な力を持っていた。

今にも動き出そうとしていた深能の左足は、ぴたりと動くことを止めてしまった。半ば無意識に。それは、深能がかつて体験したこととの無いような、《支配される》瞬間だった。まだ、彼はその事実気づいてはいない。

「私、今朝あなたに告白をした、穂積まりこの友人です。今朝の様子は、穂積に頼まれて、隠れたところから様子を見ていました」

「ああ、なるほど」深能はようやく、話の筋を理解した。「あの時は確かに言い過ぎた感があったが、でも謝る気はないな。休日の俺の予定まで把握しているなんて、少し気味が悪いし、それに忙しかった」

彼は勿論、いつもの調子でただ冷たく言い放つ。先程の穂積まりこと同様、彼にとって、彼女も礼儀を尽くすほどの相手ではないと考えたのだ。

「城井さんの大学での情報は筒抜けですよ。必ず誰かが把握しています。それは穂積だけの責任ではありません。……城井さんは、女の人の想いに、いつもあんな冷たい声で応えているんですか」

彼女の瞳は、少し色素の抜けた細い髪とは裏腹に、とても深く美しい黒をしていた。いくら日本人でも、真っ黒な瞳というのは少な

いだろう。少なくとも、穂積まりこよりは印象に残った。

「冷たい声？」

「ええ。ご自分でお気づきでは無いのですか。言葉はともかく、あなたの声は物凄く凍てつくような声でした。それこそ、今の気温なんて気にならないほど」

言いながら、彼女のその瞳はだんだんと揺れる。ようやく彼女の表情全体に視線を移すと、なんとも哀しそくに眉尻を下げていいるではないか。

どうやら、言葉の内容よりも、自分の声色が彼女の大切な友人の心を傷付けてしまったようだ。とはいえ、深能自身、そんなに怖く言ったつもりがなかったもので、これは大変な言い掛かりだと辟易した。

「そう聴こえたのなら謝ろう。他意はない」

「いえ。こちらこそ、話していて冷静になりました。穂積はすごく良い娘です。すごく大切な友人なので、一言文句を言ってやろうと早まりました。ごめんなさい」

そうは言いつつも、加納春陽の語気から怒りは消えておらず、深能は思わず溜め息をついた。そもそも、接点もないのに深能の何を好きになったというのだろう。結局表面だけ見て騒いでいる類いの人間ではないか。自分という人間は、京太郎と違って女性に優しい男ではない。それに気付いて正解だろう。あそこで優しく断ったとして、間違ったイメージを与えることこそ無礼な気がするのだ。

「でも、城井さん。一年も同じ班で、よく実習でもご一緒になったのに、私の名前を覚えてくれていないのは、ちょっと腹が立ちました。失礼しました」

彼女が肩をいからせて立ち去ったあと、しばらくしてから深能は携帯電話を尻のポケットから取り出した。最近流行りのスマートフォン

オンで、キーボードもついた、よりパソコンを踏襲したモデルだ。暗い藍色のそれを操作して、目的の人間に電話を掛ける。

『はいはい。みーちゃん、なあに？』

おちやらけている男の声だ。相変わらずである。

「誰がみーちゃんだ。俺、先に帰るから」

『え、もう用事終わったの？ ちよつと待てよ。もうちよつと待って。今、事務室だからすぐに行くし。いま何処？』

「桜の木。早くしろ」

『あんだ、昼過ぎまで白滝先生のとこだつて言つてたん』

「緊急手術らしい。これでも一時間近く待つてやったのだが、気に食わないか」

『解つたよ。じゃあ、待つてろよ』

京太郎が電話の向こうで笑つていると、すぐに解つた。あいつの、この独りではいられない性格は困つたものだと思つし、本来ならあまり馴れ合いが好きではないから気が合わないはずだ。それでも受け入れてしまうのは、やはり数少ない友人だから、ただの他人とは違つたのだらう。

具体的には自分ですら解らない、なんとも特異な存在だ。

「ところで、高校生との合同実習の班で、加納春陽という女子はいたか」

本当のところ、こちらの方が本題だつたのだが、それは伏せて淡々と問う。

女好きの京太郎は勿論からかつてきたが、そういうときは無視してやればあちらも黙る。

面倒なのでいろいろと省いて要点だけ説明する。その間彼は黙つて聴いていたが、ある程度説明し。

「で、加納春陽はすごく怒つていようだつたし、あんなの俺たちの班にいたか、どうも思い出せなくてな」

「深能くんつて、めちゃくちゃ頭良いのに馬鹿だろ」

漸くの返事は、受話器と背後からほぼ同時に聴こえ、振り返れば、

寒がりの彼はそれらしく嚴重な防寒対策の上で、失礼なほどの呆れ顔をこちらに向けていた。

「馬鹿と言われたのは初めてだ」

深能の訝しげな表情に、薄茶のパーマヘアを木枯らしに靡かせた京太郎も、鏡面よろしく同じような顔を返してきた。甘めでそこそこ整っている彼の顔は、三枚目な性格と、女の前で増す優しさを如実に表している。完璧な均等さには掛けるけれど、たれ目がちで人を拒絶しない瞳が、彼の学院中での顔の広さの理由のひとつかもしれない。

「加納春陽つて、かなり有名な子じゃん。実技の成績が良いし、おまけに美人でスタイルもいい」

深能はふうんと素っ気無く答えて、すると京太郎は頭を抱えるような仕草をした。

「ふうんつてあんた……。名前ならともかく、顔ぐらいは覚えておけよ。大体、あんた、あの子のこと散々褒めてたじゃないのー。『物凄く手際がよくて助かる』つて」

衛生看護科の三年生ともなれば、多少の慣れはあるものの、その中でも飛び抜けて小回りの利く生徒がいたことはよく覚えている。すぐく医者側が楽に出来るような、よく医学の知識も身に付いて看護師に最適の人間が。

「ああ。でも手元しか見ていなかった。あの手か」

「深能が失礼だよ、絶対」

ぱしりと軽く頭を叩かれる。深能はわりと背の高い男だったが、友人はそれ上にモデルさながらの長身で、だかららくらくと一本を決められる。

「ふうん。あの娘か」

「つつか、神経内科の加納先生の娘さんだよ、たしか」

加納先生といえは、父親と仲の良かった先生だ。深能本人とは直接の関係もないし、研修中も挨拶をした程度の間柄だが、確かに年頃の娘がいて普通だ。

似ていないので、名字を聞いても何も思わなかった。

「可哀想に。おまけに友だちは酷い振られ方をするし、散々だね」
京太郎はやれやれと首を振った。

「深能はもつと知るべきだよ。あんたは頭が良いのに、ちよつと勉強不足なところがある」

「たとえば？」

「簡単には教えねえよ。あんたが自分で解んなくちゃ意味無いからね。ま、俺は」

あんたのそういう馬鹿なところが、見ていて面白いから一緒にいるんだけどな。

京太郎は、にやにやと笑う。

彼に馬鹿にされるのは癪だが、意味もなくそれをするほど彼は育ちの悪い人間ではないから、素直にその意図を考えることにした。

父が懇意にしている人間のことくらい、もう少し知るべきだったか。いや。京太郎はそんなことが言いたいんじゃない。確かに俺はあまりに失礼だったのかもしれないが。京太郎は、もつと違うことをかんがえている。それが解らないことが不愉快だ。

いつの間にか駅前のTSUTAYAにいて、横で京太郎がDVDを選ぶのを眺め、店を出てからしばらく歩いて商店街を抜け、京太郎の住む男性用のアパートへ。三階建ての14戸、鉄筋コンクリート。南向きで、殆どは選択も自宅で出来るし、トイレと風呂も別。そのうち最上階の、東野門部やだけは、ルームシェア向けの2LDKで、京太郎はそこに、幼馴染みと一緒に住んでいる。

深能がこの部屋の敷居を跨ぐのは、専ら、その幼馴染みがアルバムで外出しているときだ。

「さて、じゃあ医療モノ二本、観ようぜ」

彼が、同居人好みのさっぱりしたリビングで、32型の液晶テレビをつけ、さつそく青い袋からレンタルしたばかりのDVDを取り

出す。一本はドラマで、もうひとつが新作の映画。どちらも、病院や脳神経外科の手術の事情などがよく盛り込まれ、医療従事者でも充分に楽しめると評判だ、とは京太郎の論だ。

見始めて、ヒロインの看護婦の手元がアップになる。もちろん女優本人か、或いはパーツモデルのそれ。

爪はきちりと長さを整え清潔に保ち、見た目は細く華奢で白い手。

『あの手』も、こんな感じだ。

加納春陽の顔も名前も、何一つ覚えてなどいなかったが、確かにあの手は鮮明に覚えている。

それは、普通の大学での実習や研修の中で目に入った、どの手よりも。

ふと気が付く。

深能に近づく人間の大半は、深能の外側というか、表皮しか見えていないが、たぶん、自分もまた同類といえるのだろう。

DVDを交換する間、プレーヤーの正面で京太郎が、雄の三毛猫を昨日、学院の桜のところで見付けたんだと、おもむろに話し掛けて来た。

いつの間に映画が終わったのだろうと、ぼんやりとした焦点を京太郎に合わせる。馬鹿みたいにあの手を思い出していた。それで何か変わるというわけでもないのに。

そういえば、自分も中庭で三毛猫も見掛けたが、さすがに性別までは覚えていない。

「首輪のない猫なら、俺も見掛けたな」

「そうそう。野良猫にしちゃ清潔感があったから、放し飼いでもしてるのかも。あれってすごく珍しいんだよね。だから拝んでおいた

よ。今度こそ、あんたを抑えて考査の首位に立てますよにつて」
ペーパーテストでは必ず二位に食い込んでくる京太郎だが、普段の素行や軽そうな外見で、教師に気に入られるような優等生、というわけではない。教師から絶大な信頼を得ているという面では深能に敵わないものの、それでも頭の良さは医学部の中でも抜きん出ており、そんな彼が、冗談混じりに深能に吹っ掛けることはよくあった。

よく、がり勉をしていると言うが、彼もまた、深能と同じような勉強に時間を費やさない人間である。

「神頼みならぬ猫頼みか。もう少しプライドを持ったほうが良くないか」

「いやあ、これであんたが満点を取らなくなったら、マジで凄いと思わない？」

「それは凄いな」
「さりげなく自信を見せたね」

京太郎は再生ボタンに手を掛けながら、にやにやと気持ちの悪い笑みを浮かべた。思い出し笑いであろうことは解るものの、気持ち悪い。

「いや、ね、あの猫つてすごい深能に似てるんだ」

「分類学上、かなり別の生物だと思うが、お前の目は節穴か」

京太郎は、違う、違う、と朗らかに笑った。画面には新作DVDのリリース情報が宣伝されており、地味な邦画に惹かれるはずもなかった。

「まずね、顔が整いすぎてるんだよ。あんたも、整形でもしてるだろってくらいだし。あと、頭の良さそうな瞳をしているんだけど、どこかとぼけてるんだよね」

「あまり嬉しくないな、それ」

深能の不満げな声に、京太郎はさらに笑った。

つまり、俺が近付きたくなるような猫なんだ、とよく解らない説明をしながら。

11月29日

医者の父が、師走の初めからアメリカのフロリダにある病院に、約半年を目処に、研究のため赴任することは前々から決まっていたことだし、深能ももう22歳の大人だから、さすがに淋しいとかはちらとも思わなかったが、父以上に金持ちの旧家から嫁いできた母と二人で残されることを思うと、賢く控えめで話の解る父親が居なくなることはいたたまれない思いである。かといって、親の金で学生をやっている身分としては、どうしても独り暮らしをさせたくないらしい母の希望を蔑ろには出来ない。

が、今朝の母親はいつも以上に、頭のねじが飛んでいた。

「深能くん、ママ、パパについていくことにしたからね」

「ぶっ」朝の三年番茶を吹き出したのは、城井家の男連中である。

午前八時、日曜の朝。

十畳ほどの広々としたダイニングルームは、母の趣味で綺麗なインテリアで飾られ、その食卓はなるべく家族揃って囲むことになっていた。

料理の得意な母は、朝からよく考え抜いた健康的な和食で机上を彩る。

「深雪、朝から面白いことを言うのはやめなさい。深能も珍しくびつくりしているだろう」

父の優能は、白髪混じりの髪を後ろへ撫で付け、すでに出勤の準備が整っている。顔立ちも、いかにも壮年の男性といったところで、ごく平凡で穏やかそうな顔立ちだ。

実際、彼は日本の医学界でもかなりの実力者であるが、そこを鼻に掛けたことはかつて一度もなく、そういう意味で、深能はまったく彼に似ていない。

「あら、本気よ。昨日考えたの。だってアメリカってどんな食事が出るか判ったものじゃないでしょ？ あっちには幸い、キッチンもあるし、パパは料理が出来ないんだから私が作ってあげなくちゃ」

対する夫人は、年齢のわりにとても綺麗な女性で、日本人としては目鼻立ちもはっきりとされている。色白でシミひとつない顔立ちを、息子はそっくりそのまま継承しているのだ。ただ、夫と違ってかなり個性的であり、そしてよく、突拍子もない行動に出るような、あの種の派手さを備えた対称的な人物だった。

「僕なんかより、深能の健康を心配してあげなさい」

「それは大丈夫。パパももう若くないんだから、遠慮せずに甘えなさい」

「俺は構いませんよ」

たしかに、若い自分は多少無茶も出来るだろうが、父は然程若くもない。健康の鬼である母が居れば、彼の慣れない外国暮らしも安定するだろう。或いは母の厄介払いが出来るといふ邪な考えもあるにはあったが、何より、二人は息子が成人した今でも、お互いをよく敬い愛し合っている関係なのである。深能にはそういう気持ちは全く理解できないが、父と母のような所謂『おしどり夫婦』が、互いの精神に良い方向で影響し合うだろうことは察する。

「僕も、深能はしっかりしているし、学生とはいえ立派な大人だから、然程心配はしていないがね。でも、一人で暮らすにはこの家は広すぎるし、不便だろう」

父の提案は尤もで、かなりの豪邸であるこの家は客室も多いし無駄に広い。家事に精を出す母がいたからこそ清潔に保たれていたわ

けで、独り暮らしには不必要な部分が多すぎるのだ。

そもそも、親馬鹿のこの母が、自分の独り暮らしを許すはずがないし、きつと何か策があるのだろうと、脳裏で悪寒を感じていると、案の定だった。

「深能くんなら、若葉さんがお世話してくれるって。あの人はいいお母さんだし、信用できるわ」

「いや、あそこは年頃の娘さんもいるだろう、迷惑だ」

「どうやら父や母と面識のある人間が一枚噛んでいるようだ。」

「元々、あそこのおうちは城井家（うち）から借りているし、息子さんのお世話はほとんどご恩返しですって、快く引き受けてくれたわよ」

「そういえば、大学近くの住宅街にある別宅を、去年の夏の災害時に家を手放すほどの不幸な被害に遭った、父の知人に貸している。誰だったか覚えていないのは、勿論深能の、他人への関心の低さに由来する。他人と暮らすのは嫌だが、この家の管理をするのはもつと面倒だから、父の信用を受けている人間なら、と、なるべく前向きに考えていたところ、」

「加納くんも若葉さんも、人が良いな。まあ独り暮らしなんて社会に出たらいくらでも出来るし、今はご厚意に甘えなさい。どれ、今日、病院に行ったときにでも、加納くんにお礼を言っておかないと」

加納？

父の朗らかな笑みはとても好きだが、今は不思議と雲って見える。「長女の春陽ちゃん、もう高校三年生なのよね。この前、遊びに行ったときに挨拶したんだけど、まあ、すごい綺麗な娘さんになっていてね。髪の毛は男の子みたいに短いのに、よく似合っているのよ。ああいうのが、本当の美人って言うのかしら」

そして深能に、学院の看護科だけ知っているかと訊かれ。

「……知らない」

「あ、そう。まああそこは広いから。息子さんなんか普通科だし、

会うこともないわよね」

母はこんなによく喋るのに、いつも家族の中で一番に食べ終わり、洗い物を流し台の、お湯を張った桶に沈める。

昨日の今日でこの仕打ちか。だがこの機会に、非礼はきちんと詫びておくべきだろうか！。

「さて、パパは病院ね、早く食べちゃって。引越しの準備は全部やっておくから任せてちょうだい。深能くんは？ 今日は何もない？」

「三國と勉強」

「また三國くん？ 好きねえ。たまには女の子と遊びなさいよ。つまんないの」

おい、余計なお世話だ、ババア。

脳裏で、普段絶対に言わないような口汚い罵るが出る。真面目に考えて、もし仮に自分に恋人や、休日に遊ぶような女友友が出来たとして、絶対に母にだけは知られたくない。普通の世話焼きな母親とは次元が違うのだ、城井深雪という女ひとは。

右手に居る父が、男はそういう話をしたからないものだから、あまり余計な口を出すものじゃない、と妻に諭す。

「だって、ただの一度もないのよ、そういう話。せつかく綺麗に生まれたのに。女は化粧でどうとでもなるけど、男は年取ったら、どんなに綺麗だった子もおしまいよ」

「深雪」

夫が優しく諫め、母はごめんなさい、と言う。

「娘さんを持つている友だちはね、たまに恋の話とかをしたりするらしいの。女ってそういうのが好きだから、うちも娘がいたらな〜って、ちよつと羨ましかったのよ」

本当は子供をたくさん産みたかったという母の願望は、よく知っていた。

小さい頃父に聞いたのは、

『母さんは、すごく愛情深い人だ。家族が増えたら、みんな同じよ

うに愛してやるんだって、よく言っていたよ。でも、それが出来な
いから、その余った分も全部、深能にプレゼントしてるんだと思う』
という話だ。

父は、ただ彼の視点で捉えた『事実』を、小さい息子に説明した
だけなのだ。

だが深能は、このときから、母のワンマンな性格に敢えて振り回
されている。

「でも、まあ、うちは、母親の我が儘に付き合ってくれる大人な息
子がいるから、それで充分ね」

母が悪戯っぽく笑う。まだまだ若い。

この人のすごいところは、いくら人並外れた感覚の持ち主でお節
介な人とは言っても、それを客観的に理解しているところだと、深
能は思う。それでいて、自分は家族に甘えていることを自覚して、
いつも、どこかでそれに対する感謝の印を伝える。

母を反抗期ですら拒絶しなかったのはそのせいだし、夫婦の仲が
睦まじいのも、きっと父は母のそれをきちんと受け止めているから
なのだろう。

今朝のやり取りの、主に加納家のくだりを、待ち合わせてい学院
の図書館で京太郎に話すと、場所が場所だけに控えめな笑い声で返
された。

「城井のおばさんは相変わらずだねえ。飽きない人だ」

「もう少し静かにしろ。俺は、あの家で独り住むよりは、物理的に
楽で良いとは思うんだ」

机で持ち出し厳禁の、東洋医学の古書を広げる。あくまで付け焼
き刃だが、白滝ゼミでは東洋医学の研究授業があるのだ。神経系に

対する漢方の有用性など、医者を目指す者として学ぶべき部分は多々あり、残念ながら詳しい本は稀覯文ばかり。そのため、課題は図書館で仕上げることになった。

休日にも関わらず、深能たちと同様の大学生で自習スペースは盛況だ。

「まあ、あなたのメンタルの方は頑丈だもんね。半年くらいわけないか」

「それより、向こうの方だ。おそらく加納春陽が嫌がるだろう。あちらは自分の子供にちゃんと事情を説明しているのか」

「意外な心配をするね、深能。まあ、いいじゃん。おもしろそうだから何かあったら教えてよ」

必要な文章を、深能は携帯電話に打ち込んで自宅のパソコンに送信し、京太郎は、本人にしか解らないような字でルーズリーフに走り書きをしていく。

作業を一時間半で済ませ、帰りに中庭を通る。グラウンドの野球部の声はよく届く。

そして見付けた。

桜の木の上で、昨日話題に上った例の三毛猫が丸まってこちらを見ている。

「あ、いたいた。昨日は会えなかったんだよね」

京太郎が頬をほっこりとさせながら、寒空の下を小走りに向かう。昨日と違うのは、黒い首輪がついていることだった。

「やっぱり飼い猫だったか」

意外にも、木から飛び降りた三毛猫は、動物好きで優しそうな京太郎よりも、わざわざ冷たい視線を送る深能に近付いて来たのだ。た。

「え、ちょ。なんかシヨック」

京太郎の淋しそうな顔は傑作だが、それはさておき。

たしかに、猫はテレビに出せそうなほど整ってしなやかな外見だが、京太郎の云う深能と似ているというのは、同意できかねる。

敢えていうなら、動物嫌いの深能が猫に対して敵意に近い感情を向けるのに対し。

「安心しろ、京太郎。こいつはお前は好きでも、俺は大嫌いみたいだ」深能は微笑を浮かべた。

猫もまた、深能に敵意を抱いているらしい、そんな眼をしていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7925m/>

美男と野良猫

2010年10月8日13時55分発行